



ソルガムを原材料に使った「タカキビール」を手にする高野さん

# ノンフィクションと 言語化

高野秀行 (ノンフィクション作家)

## 酒を主食とする民族との 衝撃の出会い

——東京・押上おしあげの醸造所、「ミヤタビール」の宮田昭彦さんが、『酒を主食とする人々』に感銘を受け、「タカキビール」というビールをつくりました。今日はぜひ、このビールを飲みながらお話を聞かせてください。

高野 (ひとくち飲んで) うん、とても美味しいですよ。ちゃんとビールらしいビールに仕上がっているのに、風味の部分にエチオピアを思い出す要素を感じます。ソルガム(タカキビ)の苦味のかな? この芯のある味わい、エチオピアの「デラシャ」という民族が飲んでいた「パルシヨータ」とよく似ています。

——その「パルシヨータ」の原材料であるソルガムを取り寄せて、副原料に取り入れて仕込んだものだそうです。やはり、ちゃんと共通点は感じられると。

高野 そう思います。現地で飲んだものはもつと酸味が強くて、同じ穀物由来の醸造酒でも、どぶろくよりマッコリに似たものでした。

——大の酒好きで知られる高野さんですが、とくに好きな酒はなんですか。

人々』は、エチオピア南部に存在するという、

酒が主食で朝から晩まで酒しか飲まない民族に迫った意欲作。一家団欒だんらんの場では、五歳児も酒を飲み、妊婦が病院のベッドで酒を口にする様子が描写されている。まさしく、誰も書かない本<sup>が</sup>が体現されている。

そこで本稿では、『酒を主食とする人々』のエピソードや、高野氏のノンフィクションとの向き合い方についてインタビューした。

誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをし、誰も書かない本を書く——。

そんなポリシーを掲げる高野秀行氏は、これまでミャンマーの麻薬地帯に住み込み、アフリカ・ソマリア内に存在する謎の国家を探索し、アジアに存在した納豆めいた食品の謎を追うなど、独自の路線を行くノンフィクション作家である。

そんな高野氏の最新作『酒を主食とする

高野 お酒はなんでも好きですけど、ビールは

とくに好きですね。エチオピアはなかなかのビール大国で、適当に入ったレストランでもたくさん種類が用意されていて驚きました。高地なのでおそらく、綺麗な水が入るのでしょ

うね。  
——あらためまして、『酒を主食とする人々』を執筆したきっかけ、そしてデラシャの人々を取材しようと思いついた理由を教えてください。

高野 もともとは二〇一九年に、生態人類学者の砂野唯すなのゆいさんの『酒を食べる——エチオピア・デラシャを事例として』という本を手にしたことから始まっています。砂野さんはこの著書で、エチオピア南部にソルガムを原料とした濁り酒だけを飲んで暮らす民族がいることを綴っています。皆、二歳くらいの頃からこの酒を飲んで成長し、固形物はほとんど食べていないにもかかわらず筋骨隆々としているというので、ものすごく驚いて興味を持ちました。

ただ、私としてはすでに研究書が出ている以上、後追いで本を書く気がしませんでした。そんな中、TBS系『クレイジージャーニー』のスタッフから、「どこか一緒に行きませんか」と声をかけてもらい、テレビ番組の収録で訪ねるのならちょうどいいかもしれないと思いついた

んです。

——それが翻意し、こうして一冊書き下ろすことになったのはなぜでしょう。

高野 オンエアされた番組を見て、私がメインだと感じていた部分がほとんどカットされていたことが大きいですね。もちろん、テレビにはテレビの切り口があるので、それを否定するつもりはありません。ただ、映像と文字では得意な領域が異なることをあらためて実感して、自分なりにエチオピアで体験したことをまとめておきたいと考えました。

——紆余曲折うよまげありつつも、デラシャの集落に到達して「パルシヨータ」を口にされたわけですが、最初に飲んだとき、どのような印象を持ちましたか。

高野 青臭かったですね。青汁入りのどぶろくという雰囲気、ひとくち飲んで「うまい!」となるものではなかったです。かといって未知の酒という感じでもなく、慣れてくると徐々に美味しく感じられるようになりました。

——それにしても、『酒を主食とする人々』の中で描写されている、デラシャの皆さんとの晩餐ばんさんシーンは衝撃的でした。子どもと一緒に酒盛りをするというのは、われわれの常識では考えられないことです。

高野 デラシャの人々の感覚では「酒盛り」ではなく「食事」ですからね。それに、水を口に

するよりも、よほど安全なのでしょう。向こうの湧き水はぬるいので、地中深くから出てくる濾過ろかされた水ではないのだと思います。実際、今でもたまにコレラが流行しているようですし。

——本書では地元の医師にも取材し、デラシャ人の健康状態について話を聞いています。酒が子供の発育に良くない、妊婦は飲むべきではないという通説を、高野さんは今どのように受け止めていますか。

高野 酒が体に悪いというのは、必ずしも科学的な考え方ではないと思っています。というより、見方として「浅い」と表現したほうが適切かもしれません。酒を摂取することを部分的に捉えるのではなく、食生活や生活全体を見なければ、本質はわからないはずですよ。日本人だって酒だけを飲んでいるわけではなくて、脂質や糖質などさまざまなものを摂取した上で、成人病のリスクに直面しています。その点、デラシャの人々は油も砂糖もほとんど使わない生活をずっとしていますから、われわれよりよほど健康的ともいえます。

——本場に酒の良し悪しを論じるのであれば、脂質や糖質を摂る人と摂らない人、二通りのサン